

371) 後悔

コーヒーカップに口紅のあと 少し残して女^{おんな}が出てゆく
僕は黙って見送ったけど それが最後の僕たちだった
そして10年^{とき}歳月が流れて あの女^{ひと}のこと噂で聞いた
二人の子供この世に残し 30歳で亡くなったのだと

3年間を一緒に暮らし それぞれの道歩んだけれど
別れてからもあの女^{ひと}のこと 忘れたことは一度もなかった
姉さん女房の優しい女^{ひと}で いつも笑顔で迎えてくれた
いま人生をふりかえるとき 最初で最後の女^{おんな}だった

僕の若さとわがままゆえに 苦勞と涙の毎日だった
「貧乏なんて慣れっこよ」って 言ってたけれど辛かったろう
もう少しだけお金があれば もう少しだけ甲斐性^{かいしょう}があれば
あの優しさをはなさなかった めぐり逢うのが少し若すぎた

生きてくことに疲れてたから 考えもせず別れを選んだ
プレイバックができるものなら あの年月にすぐ帰りたい
確かな愛で包んであげたい 心ゆくまで愛し合いたい
そして一緒に歳をとりたい でも気づくのがあまり遅すぎた

今あの女^{ひと}は永遠^{とわ}の眠りに どんな夢見ているのだろうか
許してくれって僕は言えない 愛してるってそれも言えない
もうあの女^{ひと}は生きてないから たった一人で合掌するだけ
おのれの過去の十字架背負い たった一人で生きてゆくだけ